

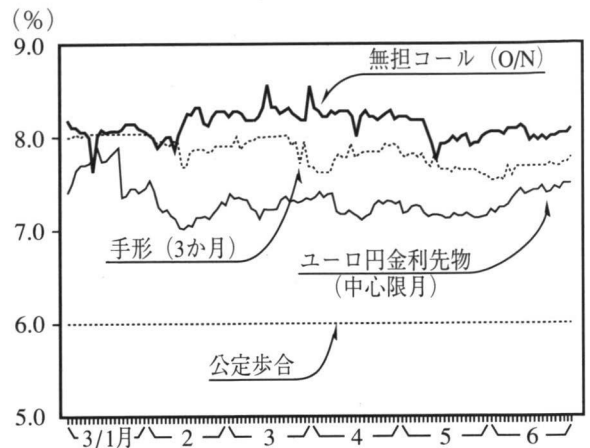
金融市場動向（平成3年6月）

1. 短期金融市場

6月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は、おおむね8%前後で小動きに推移した。一方、ターム物（手形3か月物）は上旬および下旬にやや上昇した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）も幾分上昇した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は36兆7,233億円と前月（37兆1,578億円）を若干下回った。

短期金融市場金利



2. 資本市場

6月の債券利回り（129回債）は、上旬から中旬にかけて上昇し、その後はおおむね横ばい圏内の動きとなった（6月末6.86% <前月末6.62% >、国債先物中心限月6.88% <同6.62% >）。

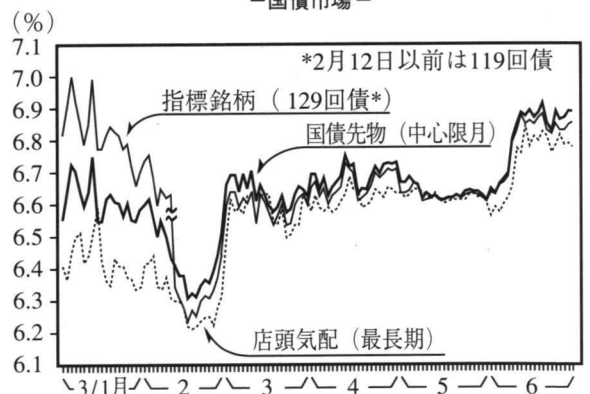
国債出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を下回ったが、先物は前月を上回った。

株式市況（日経平均株価）は、月中を通じて下落歩調をたどり、23千円台で越月した（月末終値：23,290円、前月末比△2,499円）。

株式出来高（東証第1部：月中1営業日平均出来高）は2.9億株と、低水準であった前月（3.1億株）をさらに下回った。

起債動向をみると、長期国債（10年〈価格競争入札分〉）については、クーポンレートが6月債で0.1%引下げられたのち、7月債では4月債以来3か月ぶりに引上げられた（6月債6.5%→

既発債市場利回り
—国債市場—



7月債6.7%)が、全体としては落ち着いた応札姿勢となった(募入平均利回り:6.686%、応募倍率:2.67倍)。

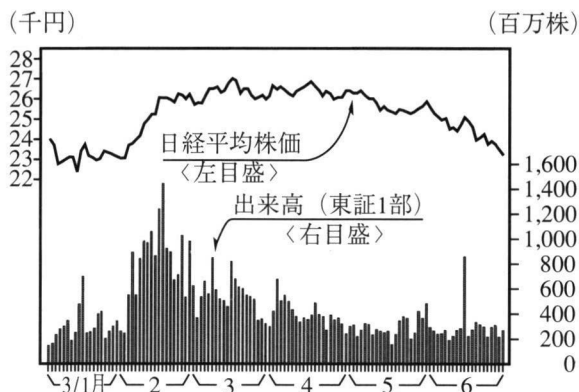
また6月の短期国債は、前月に引続き月2回発行となり、いずれも落ち着いた入札となった(6月5日入札分<6か月物>、募入平均利回り:7.423%、応募倍率:2.00倍、6月14日入札分<3か月物>、募入平均利回り:7.664%、応募倍率:1.77倍)。

なお6月債から、中期国債(定率公募入札分)の入札結果の発表(従来は入札翌日の午前10時)が、長期国債や短期国債などと同様に入札当日の午後4時30分に繰上げられた。

エクイティ市場での発行(6月払込み分、国内分)については、ユーロ市場から国内市場へのシフトの動きもあって、転換社債、ワラント債とも前月比増加した。

国内公募事業債の発行は、先行きの金利動向に対する不透明感が強まるなかで様子見気分が広がったこと等から、前月比減少した(5月2,850億円→6月1,320億円)。

株式市場

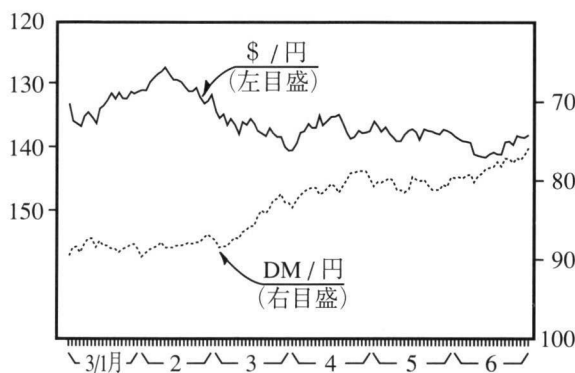


3. 外国為替市場

6月の円相場(対米ドル直物相場、終値)をみると、月央にかけては米国景気の回復予想を背景に、一時142円台まで下落したものの、その後月末にかけては、協調介入警戒感等から値戻し、結局前月末(137.97円)とほぼ同水準の138.15円での越月となった。この間、マルク・円相場(ニューヨーク市場、終値)は、中旬以降マルクが軟化傾向をたどり、75.82円で越月した。

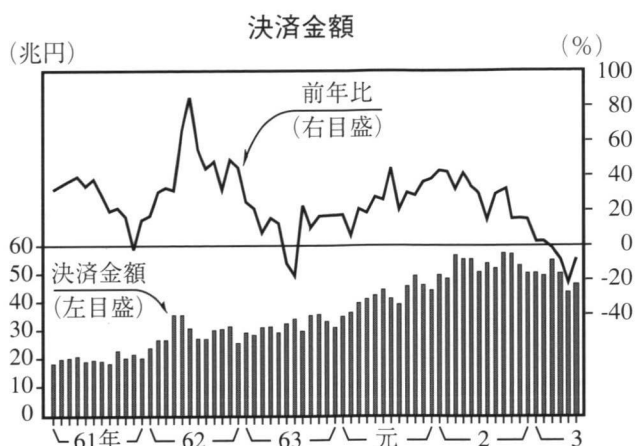
この間、外国為替市場出来高(円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均)は192.4億ドルと、前月(165.8億ドル)を上回ったものの、依然として低水準。

外国為替市場



4. 決済

6月の資金決済の金額（1営業日平均）は、前年に比べて減少した（手形交換高<東京>：前年比△12.6%、全銀システム取扱高：同△5.0%、外為円決済交換高：同△7.7%、日本銀行当座預金受払額：同△9.5%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振込口座振替）も、振込口座振替は増加したものの移転登録が減少したことから、合計では前年を若干下回った（△0.5%）。



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

6月の資金需給は、4兆9,730億円の不足と前年（4兆8,705億円の不足）とほぼ同水準の資金不足となった。銀行券要因は2兆7,224億円の不足（前年同2兆5,029億円）、財政要因は2兆6,284億円の不足（前年同2兆4,669億円）と、いずれも前年とほぼ同水準の不足幅となった。こうしたなかで日本銀行は、FBの買戻し等により資金を供給した。

7月の資金需給（国債発行織込み前）については、銀行券要因は、6月支給の夏季ボーナス資金の還流が見込まれることから月中1兆円程度の余剰（前年：同9,441億円）となる見通し。また財政要因は、支払面で国債償還、同利払い等が見込まれるものの、受入面で、夏季ボーナス等に係る源泉所得税を中心とする税揚げや厚生保険料の受入れがかさむことから、1兆8,300億円程度の不足となる見通し（前年は473億円の余剰）。この結果、7月は、月中5,900億円程度の資金不足と予想される（前年は1兆2,501億円の資金余剰）。

6. マネーサプライ、銀行券、預金

5月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.5%と、前月より0.3%ポイント低下した。これは、貸出の伸び率が若干上昇したものの、郵便貯金等マネー対象外資産へのシフトがマネー押下げに働いたことによるもの。通貨種類別にみると、現金通貨、預金通貨が伸び率を高めた一方、準通貨の伸び率は小口MMC、大口定期預金を中心に引続き低下した。

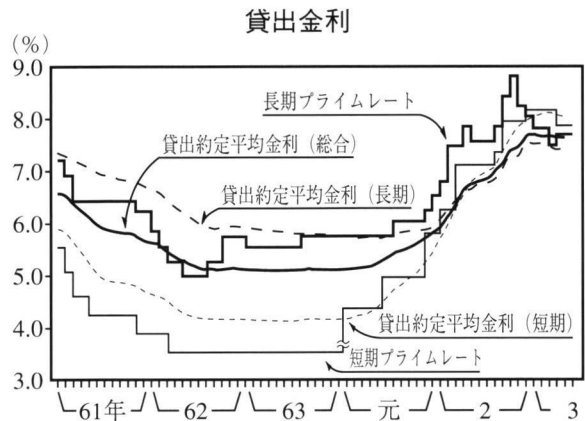
6月の銀行券平残前年比は、+2.8%と引続き低い伸び（前月は+1.3%）。

5月の自由金利預金残高（全国銀行における大口定期、MMC、小口MMC、外貨預金の合計）は、大口定期がおおむね横ばいであったものの、小口MMCおよび外貨預金が減少したことから、全体では前月比△1.0%とやや減少した（5月平残は272兆1,050億円）。

7. 貸出・預金金利

5月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、長期金利は4月の長期プライムレート引上げ（4月1日、7.5%→7.7%）の影響等から上昇したものの、短期金利が4月の短期プライムレート引下げ（4月8日、8.25%→7.875%）の影響が続くなかで前月比低下したため、長・短総合では前月比低下した（4月7.646%→5月7.633%）。

この間、5月の大口定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比△0.088%ポイントと若干低下した（4月 7.630%→5月 7.542%）。



（平成3年7月10日、調査統計局）